



H^{ostelling} Magazine



巻頭インタビュー

MIYAVI

ギターで世界中の人の心を躍らせた。

Hostelling Magazine × 地球の歩き方 www.arukikata.co.jp

冬のアイスランドを旅する Winter journey in Iceland

アイスランド

レイキャヴィーク、ブルーラグーン、ゴールデンサークル、アイスケーブ

📍トリップアドバイザー®

アイスランドの自然&野生動物ツアー

Youth Hostel Pick up

たくさんのお出逢い。高原からの贈り物

清里ユースホステル

この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。





www.yamazakipan.co.jp

おいしいから、
いつでも一緒。



ランチパック

公式webサイト

ランチパック 検索

公式Facebookページ

www.facebook.com/lunchpack.jp



スマートフォン用アプリ **ランチパックCLUB** 検索

[Google Play] [App Store] からダウンロード



信じられる水の山から
サントリー天然水



そのボトルには
「水と生きる」と書いてあった。



Vision

Principle and Philosophy

Inclusivity

世界を超えて

Learning and Understanding

考えよう

Sustainability

僕らと子ども達の未来のことを

日本ユースホステル協会はユースホステルのビジョンに基づき、日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

※本紙の情報は2017年12月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。
発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会
編集・発行人 寺島 真
TEL. (03) 5738-0546
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内
※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。
制作・印刷製本/サンメッセ株式会社

Line up

インタビュー P02
アーティスト・ギタリスト/MIYAVI
ギターで世界中の人の心を躍らせたい。

Youth Hostel Pick up P08
たくさんのお出逢い。高原からの贈り物
清里ユースホステル

Hostelling Magazine × 地球の歩き方... P12
冬のアイスランドを旅する
Winter journey in Iceland
アイスランド
■ 7泊9日 冬のアイスランド旅日誌
■ FACT ABOUT アイスランド

トリップアドバイザー Presents P18
耳寄り! 観光NAVI
アイスランドの自然&野生動物ツアー

教えて! 旅GIRL P20
松島むうの晴れときどき旅びより..... P21

Event Information P22



巻頭インタビュー

ギターで世界中の
人の心を躍らせたい。

アーティスト/ギタリスト

MIYAVI

「エレキギターを、ピックを使わずにすべて指で弾く」

という独自の“スラップ奏法”で世界中から注目を集め、

“サムライ・ギタリスト”として活躍するMIYAVIさん。

これまでに約30カ国300公演以上のライブと6度のワールドツアーを成功させ、

日本と海外の壁を一切感じさせない活躍を見せています。

そんなMIYAVIさんの語学留学時代のエピソードとは。

新たなライフワークとして活動を続けている

難民キャンプへの訪問を通じて見たこと、感じたこととは。

ロックスターとして輝き続けるMIYAVIさんの、

ステージ上では見られない知られざる一面に迫ります。

“I can't speak English.” から始まった語学留学。

Q. MIYAVIさんのインタビューをYouTubeなどで見ると、
通訳を通さず自分でどんどん英語で答えていらっしゃい
ますが、英語はどうやって勉強されたんですか？

留学先で、いっぱい友達をつくりました。

Q. たしか、語学を身につけるために25歳の時に3カ月留
学をされたんですね。

はい、ロサンゼルスに。本当は19歳か20歳の頃には英語を
習得しておきたいと思っていたんだけど、メジャーデビュ
ーをしたり、いろんな音楽活動をしたりしていく中で、なか
かなか時間がなくて。それから、海外の人と出会ったり親
しくなるきっかけがあっても、英語が話せない自分のま
ま年を取っていくのがどうしても嫌で。25歳の時に当時
のマネジメント会社とレコードレーベルに無理を言って活
動を3カ月ストップさせてもらいロサンゼルスへ飛びま
した。向こうでは英語だけでなく、ダンスも学んでいま
した。それこそ自分で発電機を買って、ダンサーの友達
たちを呼んで、サンタモニカとかでストリートパフォー
マンスをして、それで飯を食ってる他のパフォーマーた
ちとケンカになりそうになりながらやってましたね。

Q. ロサンゼルスに行った時の語学力はどのくらいだっ
たのでしょうか。

ゼロです。……いや、ゼロは言い過ぎか。「アイキャ
ンノットスピークイングリッシュ」くらいはしゃべりま
したよ。「僕は英語がしゃべれません」。それが最初のひ
と言です。

—そこからのスタートだったとは！それは、今英語を全
く話せない人でも「自分も頑張れば話せるようになるか
も！」という自信になりそうです(笑)。

今、日本では「グローバル」という単語をよく耳にしま
すが、「英語を話すこと」っていうのは世界にコミットし
ていく上での“マナー”だと感じます。「この地域に住
んでいる人の燃えるゴミの日が月曜日ですよ」という
ルールと一緒だと僕は思うんです。日本語の語彙力
とか、深さ、重さ、美しさを大事にする、というこ
とは別の話。それはそれでももちろん大切にしてい
く。けれど、それはマナーを軽視する理由にはな
らない。現状、世界の共通言語が英語ってなってい
れば、それを使ってコミュニケーションを取るのが礼儀。
実際

に、それができていないから日本はグローバルな社会で
たくさんチャンス、機会を逃している。これは、畑違いの僕
が言うのもなんですが、国の責任だと思います。教育者
の水準含め、国を挙げてもっともっと良くしていかな
ければならないことだと思っています。

レバノンを訪れて感じた、 難民問題の切実な課題。

Q. MIYAVIさんは2015年から難民キャンプを訪
問なさっているそうですね。どういった経緯で訪れる
ことになったのでしょうか。

アンジー(※1)と出会い、彼女の難民問題への信念
や活動に感化されて、彼女が特使を務めているUNHCR
(※2)を紹介してもらったのがきっかけです。レバ
ノンに2度、タイには1度行かせてもらいました。

—ユースホステル協会では、2015年に起こった
欧州難民危機(※3)の際、ドイツやスイスをはじめ
とするヨーロッパ諸国で冬の期間に難民・移民の
受け入れをしていました。

そうだったんだ。難民の人たちはどんな様子でした？

Q. 難民の方と話をする機会があったのですが、実
際にヨーロッパまで辿りつくことができた難民は、
シリアの中でも比較的恵まれた生活環境で生まれ
育った人々が多いという印象でした。MIYAVIさん
は難民キャンプに実際に行ってみて、何を
見て、どんなことを感じたのでしょうか。



レバノンでの避難生活が長引くシリア難民の子どもたちと音楽の交流

レバノン、国民の4分の1がシリアからの難民の方々という状況。4分の1が外国人って、日本ではありえないじゃないですか。レバノン政府も自分の国の国民を守らないといけなから、難民キャンプにいる大人たちは職業を得られなくて働けない。だから、正直にうちもさっちもいかずどうしようもないという状況。その一方で、子どもたちが学校にも行けず、大人に代わってがらくたを集めに行ったり、野菜をつくったりしている。彼らは物心ついた時にはすでにキャンプにいて、中にはそこで生まれた子もいる。だから、彼らにとって難民キャンプでの暮らしはスタンダードであり、ある種、デフォルトなんですよ。特に印象的だったのは、僕がギターを弾いた時の子どもたちの目の輝き。音楽のない日常を送っている分、ギターが鳴ったときの、驚きや熱量がものすごく。暗闇を照らす灯火のような彼らの笑顔を、絶やさないうほしい、絶やしてはいけないと、強く思いました。

Q. 今、彼らに必要なものとは何でしょうか。

「教育」です。第一に必要な、食べ物や水といったライフラインに関してはいろんな団体が協力合っている中で、次に大事になってくるのは、教育だと思います。初めてキャンプを訪れた時に、メーカーから提供していただいたアコースティックギターやサッカーボールで子どもたちと一緒に遊ぶ機会があったんですが、「じゃあ、みんなと一緒にギターを弾こう」って列に順番に並ぶように呼びかけたら、途中で殴り合いのケンカが始まったんです。普通に血が出てるんですね。周りの大人たちも「まあ、子ども同士のケンカだから」という感じでしたが、それこそ彼らがそのまま大人になったらケンカではなくそれが、紛争の火種になるわけでしょう。「共存するために、共有するということの大切さ」を教わる機会をもっと増やさなければいけない。これは難民キャンプだけでなく日本含め全世界に言えることだと思います。読み書きはもちろん大事だけど、モラルや哲学をどう教えてあげるのか。ここが将来的に、難民問題を解決する上で非常に重要なポイントのひとつだと思います。情勢の不安定な国に限らず、アメリカや他の国だってそう。僕自身も、正直幼い時にもっとそういう教育を受けたかったと思っています。「何をもって人として正しいといえるのか」という教育。それが今、価値観の推移によって失われているのではないのでしょうか。

※1…アンジェリーナ・ジョリー。彼女が監督を務めた『Unbroken』にMIYAVIさんが出演したことがきっかけで親交が深まったという。

※2…国連難民高等弁務官事務所。主に難民の避難先での生活や、第三国定住などのサポートを行う機関。

※3…シリア内戦をはじめ地域紛争の長期化を背景に、中東やアフリカから地中海を経て欧州へ難民らが殺到。最も深刻化した2015年は、ドイツを中心に欧州に入った保護申請希望者数が計100万人以上に達した。

自分のことで精いっぱいの人に、他人は救えない。

Q. MIYAVIさんの世界規模の考え方は、どのように養われていったのでしょうか。

自分のドアを開いたというか、自分のミッションがそこにあるんじゃないかという意味での気づきを得たのは、やっぱり難民キャンプに行ったことがきっかけだと思います。僕もまだまだ勉強中の身です。アンジーに出会う前は何も知らなかったし。日本にいと、難民問題に関する事だけじゃなく世界で起こってる事って聞こえてこないですよ。結局のところ、自分のことで精いっぱいの人に、他人のことなんか救えないんです。彼女の生き方を見て、UNHCRの活動に参加して、やっと社会への「責任」や「還元」というものを考えられるようになりました。

とは言え、僕も人間ですし、お坊さんになろうとしているわけじゃない。肉体を持っている以上は、食べることも、セックスも、睡眠も、色んな経験をして、感覚を楽しむっていうことも、自分の肉体に対してしてあげる必要があると思います。それをどう両立してコントロールしていくかは、自分も学んでいる最中です。ロックスターであり、子を持つ親でもある。昼があつて、夜があつて、男がいて、女がいて、光があつて、影があつて……そのバランスで物事が成り立っていく中で、どのようにちゃんとサイクルさせられるかを自分もまだ模索しています。

Q. お子さんがいらっしゃるといのも、MIYAVIさんの人生における価値観を形成する上で非常に大きいのでしょうか。

それはもちろん大きいです。今までは基本が一人称、例えば「これをしよう」「これを食べよう」だったのが、「これをしてあげよう」「これを食べさせてあげよう」に変わる。小さな規模ですが、“利己的”ではなく“利他的”に物事を考えられるようになったのは、やはり子を持つ事が大きなきっかけだったと思います。

Q. お子さんの存在や難民キャンプでの子どもたちとの交流を通じて、教育の大切さについて考えることが多いMIYAVIさん。今後10年、15年というスパンで考えた時に、日本の教育がどうなったらいいだろうというイメージがあれば、ぜひお聞かせください。

まずベースとして、英語の教育をしっかりと充実させること。あとは、“モラル”。道徳ですよ。日本には宗教がないので、根本

的な倫理観を培うというか、人として何が正しいのかということ学ぶ機会がめつばう少ないと感じます。大きくなってからじゃなくて幼稚園・小学校の段階でしっかりと哲学を教わる場がもっとあった方がいいと思います。

教育する環境に関しても、ただ「対価をもらって働いている」というだけでなく、「子どもたちの人格を形成する一端を担っている」ということをちゃんと踏まえて教育ができる現場であってほしい。

目の前にいる人の心を躍らせる 音楽を、世界中に広げたい。

Q. MIYAVIさんは今後、音楽活動を通じて世界をどういう風に変えていきたいと思っていますか？

「争いのない世界になってほしい」とは思うけれど、人って争うんですよね。成長過程においては、殴り合って初めて分かる部分もある。だから、争いや競い合うことが完全になくならないとは一概には言えない。だけど、子ども同士のケンカだったら、「殴り合ったら痛かったやろ？ 痛かったらやめようよ」って言えるけど、戦争はそれでは済まされない。逆に、殴られたことがないから加減が分からなくて、思いっきりひどいことをしてしまうという場合もあるだろうし。

自分が音楽家としてやれるのは、目の前にいるオーディエンスの心を躍らせること、そして、その輪を世界中に広げていくこと。少なくとも、音楽を聴いてノってる時はみんな気持ちがひとつになれるじゃないですか。音楽を聴いて「かっけー!」「気持ちいい!」「すげえ!」って、本当に心から感動してる瞬間って、たぶん殴り合いなんかしないでしょ？ 自分にできることがあるとすれば、そういう音楽を創って演奏することだと思っています。人って、「WOW(ワオ)！」を感じた時に“希望”を感じ、そして“未来”を感じるんだと思うんです。その驚きやドキドキ感、興奮っていうのは、音楽を聴いたり、旅に出て、新しいものを見て、新しい体験をして、新しい人たちと出会って……という経験から生まれるもので、それが自分のバイタリティであり、モチベーションとなり、「明日は何が起こるんだろう」という明日への意欲にもつながる。それがある種の人生の醍醐味なんじゃないかと。僕は、それをギターで提供したいし、オーディエンスと共有したい。

いつかは死んでいく中で、肉体も、財産も、地位も名誉もなくなっていく。その中で、どうやって自分の魂を磨いていくのか。そして、人生自体にどんな意義を見いだせるのか。僕自身も言ってみれば、死ぬまで終わらない旅の途中です。その過程の中で、「世界中の人たちをどう躍らせるのか」という、ギターを始めた頃の初期衝動に改めて立ち戻って、新しい音楽を創り続けたいと思っています。



難民有志で始めた自習室に集うシリア難民にタブレット端末のデモ



あの山の向こうは祖国シリア。子どもたちとサッカーに興ずる



多くの難民の子どもたちにとって初めてのロック・コンサート

Profile

MIYAVI

1981年生まれ。エレクトリックギターをピックを使わずにすべて指で弾くという独自の“スラップ奏法”でギタリストとして世界中から注目を集め、これまでに約30カ国300公演以上のライブと共に、6度のワールドツアーを成功させている。

2015年にグラミー受賞チーム“ドリュウ&ジャン”をプロデューサーに迎え、全編ナッシュビルとLAでレコーディングされたアルバム『The Others』をリリース。2016年に8月にはLenny Skolnikをプロデューサーに迎え『Fire Bird』をリリース。2017年はデビュー15周年を迎えベストアルバムをリリース。

また、アンジェリーナ・ジョリー監督映画『Unbroken』(2016年日本公開)では俳優としてハリウッドデビューも果たしたほか、映画『Mission: Impossible - Rogue Nation』日本版テーマソングのアレンジ制作、SMAPへの楽曲提供をはじめ様々なアーティスト作品へ参加するなど、国内外のアーティスト/クリエイターから高い評価を受けている。

常に世界に向けて挑戦を続ける“サムライ・ギタリスト”であり、ワールドワイドに活躍する今後最も期待のおける日本人アーティストの一人である。



ロックフォーマットにこだわらない、 次世代のギターミュージックとは。

Q. 11月8日に発売された『SAMURAI SESSIONS vol.2』
の、前作と異なる点を教えてください。

前作のvol.1は、コラボレーションしたアーティストとその場でぶつかり合った時に生まれる熱量や摩擦を主にパッケージにして創ったのですが、今回は「次世代のギターミュージックとは何なのか」を突き詰めた先の答えというか、道標になりうるアルバムになったと思います。僕はアーティストとしてロックに影響を受けて、ロックアーティストたちが築いてきた道に影響を受けてきましたが、じゃあ、「僕が今、すべきことって何だろう?」と考えた時に、必ずしもロックフォーマットでやるのがすべてではないと思うんですね。むしろ逆というか。ロックフォーマットにはこだわらず、「新しい未来の音」にMIYAVIというアーティストのアイデンティティが表れている作品、という感覚ですね。冬から開催するツアーに「Day 2 Begins」というタイトルを付けたのですが、「ここからまた新しいDAY 2が始まる」という気持ちです。

どんな絶景も、 インスタでは鳥肌は立たない。

Q. 今回コラボレーションしたアーティストの中だと、1998年生
まれの女性ラッパー・ちゃんみなさんがHostelling
Magazineの読者層に最も近いのですが、10代から20代と
いう世代に対して何か感じていることはありますか?

人と人の接点が変わってきているよね。これは単純に、テクノロジーの進化によっていろんなことがデジタル化されているからだと思います。だって、言ってしまうと旅なんかしなくてもアフリカの町をGoogleマップで見られるわけでしょ。この過渡期は、音楽業界にも訪れていて、確実に音楽そのもののあり方を変えている。そのうち音楽も、AI(人工知能)が創る時代が来る。まあ、人間がリスナーである以上はやはり作り手も人間だろうけれど、AIが感情を数値化できた時にすごく近いところまでいくんじゃないかなと思います。ただ、人としての感情や経験の伝達に関しては、テクノロジーがどれだけ発達しても、伝えきれないものがある。例えば、どんなに素晴らしい絶景をInstagramで見ても、なかなか鳥肌は立たないと

思うんです。それは単純に、人が感動する要素は視覚的な情報だけじゃないから。そこに行くまでの道のりや、その場所のにおいや温度、聞こえてくるもの……そのすべてが“経験”になるわけで。いつか脳みそに近い情報量を送れるドローンのようなものが飛ばせるようになったら話は別ですが、現段階においては実際に経験するということに勝るものはないでしょう。そういう意味でも、旅をすることこそが人を育てるのだと思いますし、特に若い世代の人たちにはいろんなところに行っているような経験をしてもらいたい。よく「移動距離の分だけ人は成長できる」というけど、それは、そういうことなんじゃないかと。かといって、同じ場所を行ったり来たりしたってしょうがない。いろんなものを見て、聞いて、感じて、そして考えて、それをどう自分で咀嚼してアウトプットしていくのかというプロセスが、きっと人を育てるんでしょね。

Q. そのためには、海外に旅に出てみるのも選択肢のひとつなのでしょうか。

日本の内側から「日本最高!」って叫ぶんじゃなくて、海外のいろんなところを見て、その上で「ああ、日本って最高だな」って思えるかどうかって、本当に大事なことだと思います。僕自身も、「日本固有の伝統って何だろう」とか、「何をもって自分たちは日本人なのか」というアイデンティティに意識がいくようになったのは、海外に行くようになってから。他の国に行くと、ヨーロッパの人もアメリカの人もアジアの人もみんな、それぞれちゃんとそれを持って、自分の国のことをちゃんと語れる。「果たして自分は自分の国のことをどれだけ知っているのか」に気づくには、世界の人とコミュニケーションを取れるようになることが大切だと思います。

MIYAVIさんサイン入りCD
「SAMURAI SESSIONS vol.2」

「サムライ・ギタリスト」MIYAVIが、

ジャンル/キャリア/国境さえも越えたアーティストと真剣勝負を繰り広げる
対戦型コラボレーション・アルバム第2弾!

SAMURAI SESSIONS vol.2

9組のアーティストに加え、
MIYAVIが自身と対決する楽曲を加えた全10曲を取録!

2017年11月8日 発売

01. Dancing With My Fingers/ MIYAVI vs 三浦大知
02. Gemstone/ MIYAVI vs SKY-HI
03. Fight Club/ MIYAVI vs EXILE SHOKICHI
04. Banzai Song/ MIYAVI vs VERBAL
(m-flo/PKCZ(R))
05. Bumps In The Night/ MIYAVI vs Masato
(coldrain)
06. No Thanks Ya/ MIYAVI vs ちゃんみな
07. Flashback/ MIYAVI vs KenKen
(LIFE IS GROOVE, RIZE, Dragon Ash)
08. All My Life/ MIYAVI vs HYDE
09. Forget You / MIYAVI vs シェネル
10. Slap It / MIYAVI vs 雅-MIYAVI-

抽選で3名様に
プレゼント!

応募締切 2018年2月

ご応募は日本ユースホステル協会
ホームページの専用お申込みフォームから!
<http://www.jyh.or.jp/hm/>

※なお、当選発表及びプレゼントの作品は、
商品の発送を以てかえさせていただきます。





つづきをダウンロード(無料)



HostellingMagazine vol.11
まとめてダウンロード



トリップアドバイザー Presents P18
耳寄り! 観光NAVI
アイスランドの自然&野生動物ツアー



インタビュー P02
アーティスト・ギタリスト/MIYAVI
ギターで世界中の人の心を躍らせた。



教えて! 旅GIRL P20



Youth Hostel Pick up P08
たくさんのお出逢い。高原からの贈り物
清里ユースホステル



松島むうの晴れときどき旅びより P21



Hostelling Magazine × 地球の歩き方... P12
冬のアイスランドを旅する
Winter journey in Iceland
アイスランド
■ 7泊9日 冬のアイスランド旅日記
■ FACT ABOUT アイスランド



Event Information P22